

# 文豪先生

bungousensei

第二話

## 中川善史

絵・かないてつお



「おーい」

と文豪先生が、ろんろんを呼ぶ声がします。

「はーい。先生、何か用か」

「出掛けるぞ。支度をしてくれ」

「はーい。わかったぞ。先生がお出かけの時の支度、と……」

ろんろん、いそいそと働き始めます。

「まず、お茶の用意、それから、おせんべい」

「おまんじゅう、忘れちゃいけない読みかけの」

「マンガ……先生、支度が出来たぞ」

「お前は、なんの支度をしているのだ」

「わたし、ろんろんは、先生がお出か

けをしている時は、家でお茶を飲ん

でお菓子を食べてマンガを読ん

るので。その支度が出来たから、も

う、出掛けていいぞ」

「そつちの支度じゃなーい！」



文豪先生、手にステツキと風呂敷包みを携えて出掛けてまいります。風呂敷包みには、原稿用紙とウオーターマンの万年筆と広辞苑が入っております。

秋めいた村の道を歩いていくと、妙な歌声が風に乗って漂ってきました。その耳ざわりなこと、不気味なこと、たちまちあたりの澄んだ空気がよどんでくるような気がしてきます。

ぼーくは ヒーロー

すーぱーじぞう

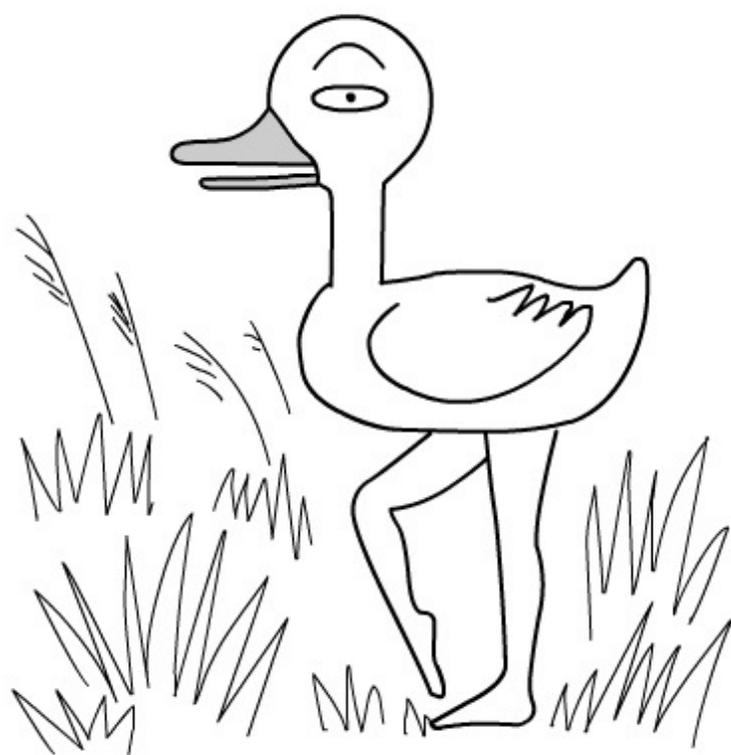
わるーい やつらを

やつつけない



じぞうパンチを くりださない  
じぞうろけつと はつしやしない  
じぞうじえつとで とんでかない  
だって ぼくは いしのじぞう  
めったなことでは うごかない  
よいこがよんでも しらんかおー  
いしだからー

(第一回参照)



「ああ、さわやかな秋の野辺が急に暗くなってきたような気がする……こ、この声、聞き覚えはあるが…… 思い出したくない…… この歌を聞くものは、胸かきむしり、こころ乱れ、さながら幽鬼のごとく荒野をさまようことになるのだ……」

と、急によるめきつつ、おぼつかない足取りになった文豪先生へ、「おーい」

と、呼びかけるものがあります。先生は、その声に耳を背けるようにして、

「おお、そは恰も人生の深淵の如く、目を背けたくも背けられず、耳を塞ぎたくも塞ぐあたわず、急流に巻き込まれんとする木の葉の如くに、我は恐れつつも、そこに近づく……」

「おい、先生」

「ああ、いずこよりか、かの邪悪な声が聞こえる」

「先生つたら」

「そは、あの不気味な歌の声の主にして……」

「なにが不気味な歌だ。自分で作ったんだろう」

と云う声はもちろん地蔵でありました。先生、なおも、地蔵の存在を認めないかのごとくに、

「空がこんな青いのに、とてつもなく不吉なものに出会う予感がある。今日は、帰ろう」

そう言ふと、くるりと背を向けて家の方へ向かおうとします。

「おい、帰るな。こつち向け」

先生、ゆつくりと振り向くと、地蔵と目が合いました。先生は、顔をゆがめて、

「ああ、不吉な予感が当たった」

「なに言つてやがるんだ。自分でやつて来て不吉な予感もなににもないものだ」

「いや、あんたにだけは会いたくなかった」

「俺に会いたくなかったら、なんで、こつちへ来たんだ」

文豪先生、地藏にそう言われると、本当に何故来たかを忘れてしまったらしく、しばし、首をひねっていました。ぽんと掌を叩いて、

「そうそう、あんたに用事があつたんだ」

「会いたいのか会いたくないのか、どつちなんだ」

「いや、あんたが、あまりに不気味な歌を歌っていたもんだから、つい動揺してしまつて」

「不気味な歌つて、これは、こないだあんたが作つてくれたやつじゃないか」

先生、再び首をひねり始めます。「ええと……」と言う声も口から漏れましたが、また、ぽんと掌を打つて、  
「あ……そうそう。そうだった」

どうも自分の作だというのを忘れていたようです。あわてて、

「うん、よく聞いてみると、なかなか味わい深い歌じゃないか」と言い繕いました。

地蔵、つくづく感心したように、

「……うーん、なんか、あんたが、売れない貧乏作家の癖に平然としている理由がわかるよ  
うな気がするよ」

「なんだ？神に愛されているから？」

「底抜けの楽天性、信じがたい記憶力のなさ、驚嘆すべき言動の不統一……ま、ひと言で言えば、バカ、だな」

それを聞くと、文豪先生、ゆがんだような笑みを浮かべて、

「ありがとう。地蔵君。そのうち、すてきな漬け物石にしてあげるよ」

「うるせえ、帰れ帰れ、この三文作家」

「ふん、誰がこんなところに長居するものか。そのうち、底なし沼に放り込まれたいのか」

と、文豪先生、憤然として、きびすを返して帰りかけますが、二、三歩歩くと、また戻ってきて、



「……あ、帰つちやいけないんだ。今日はあるたに用事があつて来たんだ」

「なんだ、また、あの妙ちきりんな歌と踊りをやって見せようつてのか」

と、地蔵の方は相変わらず毒づいています。

「今日は、歌なんかじゃない」

「ふん、小説とおんなじで、歌もたちまちネタ切れか」

ふ、と文豪先生、へへんと口の

端で笑つて

「なにを。歌ぐらいすぐ出来るさ。

どうだ、こんなのは；

〽もしもし、地蔵、地蔵さん

世界のうちでお前ほど

歩みののろい者はない

のろいと言うより動けない」

（「もしもしカメよ」の節で）



「なんだ、それは替え歌じゃないか」  
「面白いじゃないか。こういうのもあるぞ」

△地蔵さん 地蔵さん  
お腰につけた吉備団子  
ひとつ私くださいな

あげましようあげましよう  
これから鬼の征伐に  
ついて行くならあげましよう

奪います盗みます  
なにしろあなたは動けない  
鬼の征伐なんて夢の夢  
（「桃太郎」の節で）



地蔵は、それを聞くと情けなさそうな顔をして、

「おまえ、そんなイジメみたいな歌ばかり歌っていて楽しいか。帰れ帰れ」

先生の方も、売り言葉に買い言葉、

「ああ、帰るとも。誰がこんなところにいつまでもいるか……」

と、道の小石を蹴飛ばして家の方へ行きかけますが、

「……じゃなかった、あんたに用事があったのだ」

と、また、戻つてきます。地蔵は、

「だから、なんだよ」

「私は、あんたの活躍する小説を書かなきゃいけないかったんだ」

地蔵も、自分の小説と聞いて、喧嘩している場合じゃないと思つたらしく、

「そうだ、早く書けよ。早く書かないから、あんなくだらない歌を歌つて退屈を紛らしていたんだ」

と言いましたが、文豪先生の方は、三たび、

「くだらない歌とはなんだ。帰る……と、憤然として帰りかける

が、用事を思い出して戻ってくる」

と、もはや自分一人でセリフからト書きまで担当しながら、行ったり来たりしています。

「なんだ、帰ろうとすると思いつくんだな」

「ふふふ。これが、私の開発した『帰ろうとする記憶術』だ」  
「そんなに威張れた記憶術じゃないぞ」



さて、さんざん、時間を無駄に使った挙げ句、二人の会話はようやく本題に入ります。

「あんたの小説を書くからには、やはり、あんたについて知らなきゃいかんからな。今日は、その取材に来てやったのだ」

「ほう。ようするに俺の話を書ききたい、というわけだ」

と、地蔵はちよつとうれしそうに言いました。

「そういうわけだ。だいたい、あんたは、いつからここに立っているのだ」「そうよなあ……」

と、地蔵は遠い目をして空を見上げます。

「まあ、俺もいつかは、誰かに俺の歴



史を語らなくちゃいけないと思つていたが……」

「どうせたいした歴史じゃないんでしょ」

と、先生は茶々を入れずにいられません。

「うるせえ……そうそう、あんた、後ろに回つて俺の立っている台座を見てみる」

文豪先生、地蔵の後ろで台座の苔を払うと、もうだいたいぶ減つてはありますが、刻まれた文字が現れてまいります。

「ほう、天保三年とあるな……じゃあ、あんた、江戸時代の後期からここへ立っているのか」

「そういうことよ」

「じゃあ、立派な仏であり、立派な文化財じゃないか」

「ま、ま、まあね」

と、地蔵、今度は、なぜか少し恥ずかしげです。

文豪先生は遠い宇宙の彼方を見るように青空を見上げて、

「地蔵菩薩……五六億七千万年後に弥勒菩薩が現れて一切衆生を救うというが、それでも、なお弥勒によつても救いきれなかつた者共

が、地蔵によつて救われるという…… いわば、究極の仏、仏教界の最後のセーフティネット、それが地蔵だ…… すごいじやないか……」

と、感動を帯びた口調で語っていましたが、急に現実に取り戻されたように、

「それにしちゃあ、あんたは、なんか品がないな」

「うるせえな」

「ともかく、あんたの歴史というやつを聞かせてくれ」

「……俺はな、この村と本街道をつなぐ道の辺に、天保三年、旅人達の安全を願つて、また、災いをもたらす者から村を守ることを祈つて、建立されたのよ」

「ほう」

「村人の俺への期待は大きかった。俺を刻んだのは、この辺一帯で一番の腕を持つという石工・左甚六郎だ。この名工の手によつて、石から掘り出されようとする間、俺の心は希望に燃えていた。地蔵としてこの世に生まれ出る誇りでいっぱいだった。

……いよいよ俺は彫り上がり、なにか仏としての力が湧き出てく



るような気がしたよ。そして、  
村人達も何月何日と日を決め  
てお坊さんにお経を上げて貰  
い、俺に魂を入れる儀式を行  
う予定にしていた。それに  
よって、俺は、名実ともに地  
蔵菩薩としてこの世に降臨す  
るのだ」

「ふんふん」

「ところが、だ……」

地蔵はうつむき、声がかす  
れてきました。

「おい、どうした。あんた、震  
えているぞ」

「その……その儀式の三日前  
に……」

「儀式の三日前に？」

「・・・・・・・・川向こうを通るバイパスが開通しちやっただ  
あ・・・・・・・・」

地蔵、おーんおーん、と声を上げて泣き始めます。

「バイパスねえ・・・」

「この道よりはるかに楽に本街道まで行けるバイパスなんだあ。も  
う、この道を通る人なんていなくなつて、みんなそつちの方へ行つ  
ちやっただあ」

「そのこと、誰もあんたに教えてくれなかつたのか？」

「あつちはあつち、こつちはこつちで、全然、連絡なしにやつてた  
らしい・・・・ところが、開通と聞いた途端、みんな、こつちのこと  
なんかボンツと記憶からすつとんじやつて、坊さんも石工も庄屋  
も、バイパスの開通式の方へ行つて浮かれ騒ぎやがった。もう、俺  
の事なんてすつかり忘れちやっただあ」

地蔵は、くすんくすん、と、しばらくしゃくり上げていましたが  
「おい、さつき台座に書いてあつた字を見ただろう」

「天保三年、としか読めなかつたが・・・」

「そうだろう。あとの何月何日、とか、村の名前とか、石工の名前

とか、儀式のあとで彫り入れるはずだったんだが、天保三年、で、やりっぱなしになっちゃったんだあ……」

文豪先生、しばらく泣きじやくる地藏を見ていましたが、「うーむ。それから、ずうつとあんたは、一人つきりで誰にも相手にされず、ここに立っていたのか。気の毒だな……」

……そうだ、あんたに送ってあげたい言葉があるよ」

「なんだ。ぐすつぐすつ」

『仏作って魂入れず』」

「わあーん、それがなんだってんだ」

「ちようど、あんたのことみたいじゃないか」

「わあーん、ぴったり過ぎて、慰められない」

「そうかな」

「わあーん。あたりまえだ。言葉というのは、ぴったりなら何でも

いいというもんじゃないんだぞ」

「ほう、例えば」



「……例えば、馬にお経を読んであげている坊さんがいるとするぞ。くすんくすん。そこへ人が来てだな、

『お坊さん、お坊さん、そんなことしても、馬の耳に念仏ですよ』  
といつても、

『さよう、拙僧は馬の耳に念仏を聞かせているのです』

『いえ、だから、そんなのは馬の耳に念仏だというのです』

『おつしやるとおり馬の耳に念仏を読んでいるのです。そのとおりです』

『いや、それじゃ馬の耳に念仏だと言っているのですよ』

『はい、ですから、拙僧は馬の耳に念仏しているのです』

『だから、それが馬の耳に念仏だからおやめなさいと言っているのです』

『いえ、拙僧は馬の耳に念仏しようとして馬の耳に念仏しているのですから、それを馬の耳に念仏だと言われても馬の耳に念仏ですよ』

『やれやれ、これじゃ、馬の耳に念仏だ』

ということになつてだな……くすん……わかつたかー！ぴつたり

だからいいというものじゃないんだ……」

「いや、それは、悪かった……あんたがそんなに馬が好き  
だったなんて……」

「問題は、馬じゃなーい」

先生は、しばらく困ったようにたたずんでいましたが、

「いや、悪い悪い……まあ、あんたの心の傷になっ  
ていることまで話させ悪かったな」

「くすんくすん」

「この世に生まれてきた途端に満身創痍か」

「わーん、なんちゅう言いぐさだ」

「仏作って魂入れず」

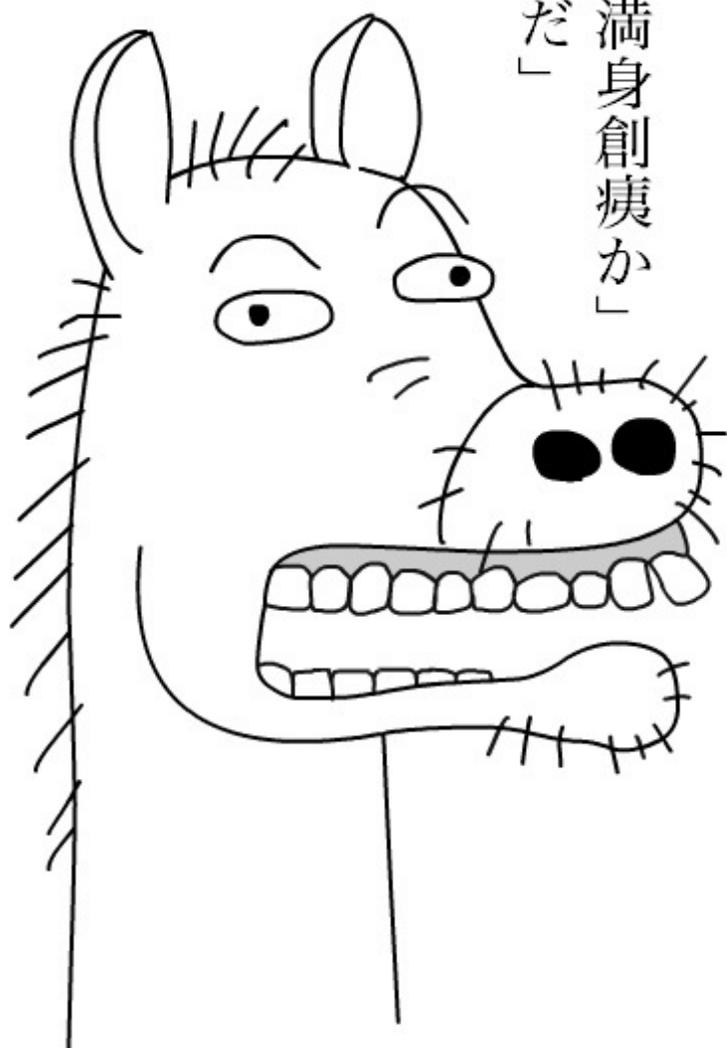
「うるせえ」

「仏のはんぱもの」

「ううう」

「できそこない」

「ばかー」



文豪先生、風呂敷包みの方はついに一回も開かず家に戻ってまいります。

「先生、お帰りー」

と、ろんろんがしつぽを振り振りお出迎えます。

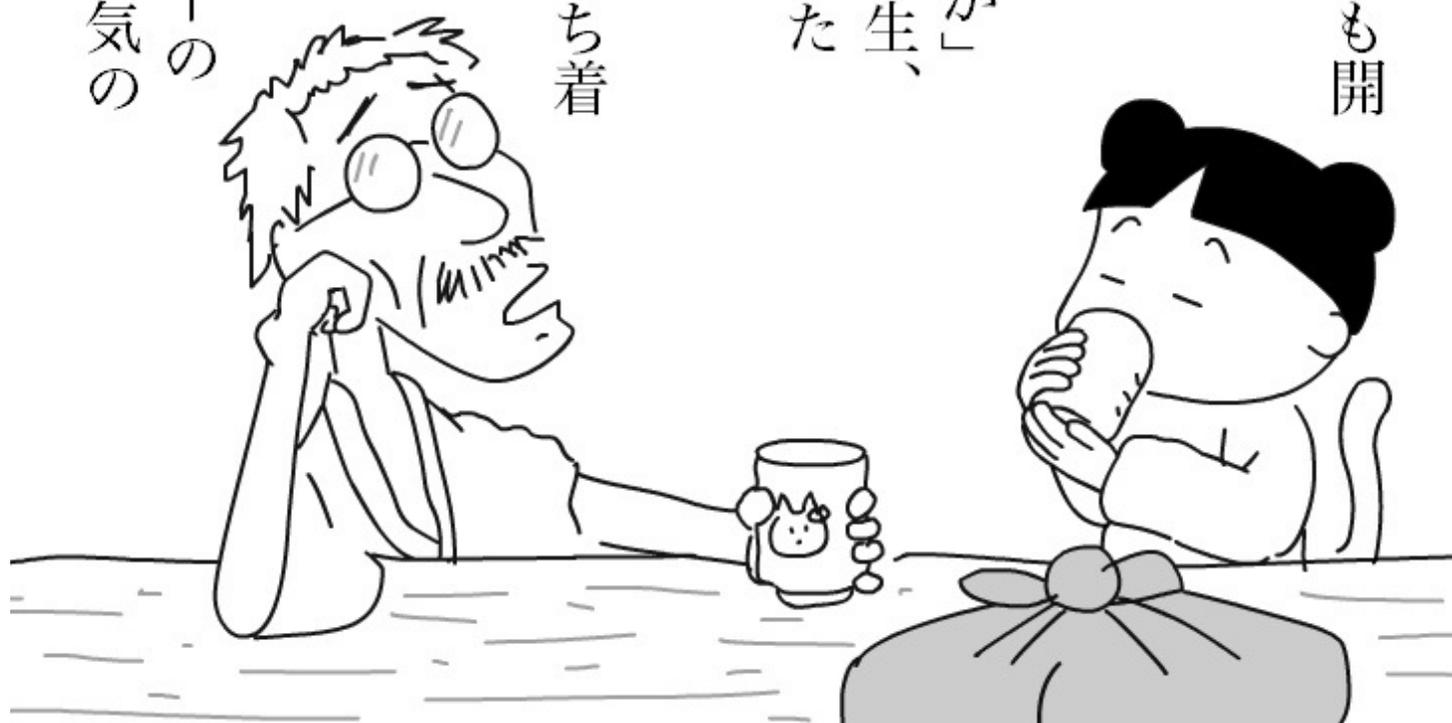
「ろんろん、別に変わったことはなかったか」  
「うん。しつかり留守番してたぞ……先生、早かったな。出たと思ったらもう帰ってきたな」

「さては、おまえ、ずっと寝ていたな」

先生、いつものように書斎の机に腰を落ち着けて、ろんろんの持ってきたお茶を一服します。

「先生の方はどうだった。地蔵の小説、うまく書けそうか」

「むずかしいなあ。あいつは自分がヒーローの小説を期待しているらしいが、ヒーローっ気の



かけらもないからな」

と、さつき地蔵に聞いてきた話を、ろんろんに聞かせます。

「・・・しかも、魂を入れてもらえなかつただけじゃないんだ。翌年から、天保の大飢饉というのが日本中に起こって、ついにはこの村でも飢えに苦しむ人が続出したんだ。そうしたら、これは、あの地蔵のたたりじゃないか、というやつが出てきて、ますます誰も近寄らなくなつたらしい」

ろんろんは無邪気に、

「それをそのまま書けばいいじゃないか」

「ものすごく暗くて悲惨な小説になるぞ。とても、あいつに読ませられたものではないぞ。夜な夜な村中に地蔵の泣き叫ぶ声が響き渡るぞ。」

せめて、なにか、地蔵にロマンスでもあれば・・・・・・・・いやいや、そんなのがあるはずがないなあ・・・・・・・・」





さて、また地蔵に戻ります。  
またまた喧嘩別れ同然に、  
文豪先生が立ち去った、すぐ  
後のことです。

地蔵から少し離れたところに、  
大きな楠が生えておりま  
す。その幹の陰に立って、地  
蔵と文豪先生の話を立ち聞き  
しているものがありました。  
文豪先生が帰っていくのを見  
て姿を現し、地蔵の方へ近づ  
いていきます。

それは、髪を後ろにまとめ、  
ジーンズに白いブラウス姿の  
若い女性でした。

ぼーくは ヒーロー

すーぱーじぞう

わるーい やつらを やつつけない・・・

ぽつぽつと、歌を口ずさんでいる地蔵に、その女性が話しかけま  
す。

「あのう・・・お地蔵様、ちよつと、お話をさせていただけいでよろし  
いでしょうか」

振り向いた地蔵の眼が、きらりーん、と輝きます。まさか、女性  
に話しかけられることがあるなどと思つてもいなかつたのでしよう。

「はーい」

と声が裏返つてしまったのを、咳払いで誤魔化して

「なんだい。俺に何か用かい」

無理矢理、声を渋くして返事をしました。

「私、こういうものですが・・・」

彼女が差し出した名刺には、

『村立文化財調査保護研究所 夏目民子』とありました。

「あ、名刺ね・・・俺、名刺受け取れないから、そこの前に置いと

「はい、では、ここへ……  
まるで、お供えですね」  
「拝むんじゃないーい！」

さて、地藏に近づいてまいりました謎の美女（謎か？）、果たして、どのような目的を持っているのでありましようか。

そのお話は次号にて。

（つづく）



## 文豪先生 第二話

<http://p.booklog.jp/book/24554>

文：すずめの巣

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

絵：かないてつお

発行所：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24554>

ブックログのパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24554>